
遊廓異聞書

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊廓異聞書

【Nコード】

N3874P

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

ゆらゆら揺れる煙管の煙。

此処は遊廓、男と女が交わる処。

ふうと煙を吐き出して、序でついでに唾も吐き出した。

さあ、おいでませ。

籠の鳥

ふう。

煙管を吹かせば、薄煙が渦を巻いて消えて行った。

「白鷺しらさぎ、何してんだい！ちゃんと客寄せしとくれよ！」
「……あたしがかい？」

女将おかみの言葉に、白鷺は形良い眉を片方上げて視線を投げる。

此処は遊廓。

何処の世ともつかない妄執の果て。

女達はひたすらに身を売り、男達はひたすらに欲を吐き出す。

（下らねえなあ）

ふう。

もう一吐きして格子の外をぼんやりと眺めた。

何時から居たのか等、知りなし無い。

気が付けば此処が居場所で在った。

禿かむろを経、新造しんぞうを経て、遊女に為った。

見知らぬ男の下で、白々しく喘ぐことを覚えた。
諍い合う女達を上手く躲す術すべも覚えた。

(下らねえ)

「白鷺！」

「……相よ」

重い腰を上げて、朱塗り格子に手を伸ばす。

(……仕方ねえか)

気付いた時には、籠の鳥。

籠の鳥（後書き）

敢えて、雰囲気を出すため漢字を多用しています。
難しい廓言葉は、わからないので出てきません。
誤字脱字報告は、とてもありがたいです。

掃き溜めの鶴

「新入りだよ、面倒見てやんな！」

遅い朝餉あさげに食らい付く遊女達に女将は其れだけ言うつ、幼い少女を残し、慌ただしく去って行った。

此処は遊廓の大部屋。

遊女達が朝夕と飯を食うべく集いし処。

働き詰めの同胞達は、置き去りにされた少女等お構い無しに食い続けて居る。

（泣きそうじゃねえか）

いち早く朝餉を平らげた白鷺は、煙管を吹かしながら其方そちらへ視線を投げた。

此処では新入り禿等、そう珍しい事では無い。
誰しもが其うして今此処に居る。

（何処で拾って来たんだか）

俯いた儘泣き出しそうな少女は、どう見ても十其此等とつちらで或ろうか。
禿の慣わしで散切りにされた髪は艶やかで、肌は白く滑らか、伏せた睫毛は長く其の下したの黒目は大きく。
そして潤んで居た。

「名は？」

「何だい白鷺、面倒でも見てやろうってのかい」

近くもない処から声を掛けた白鷺に、げらげらと笑い声と野次が飛ぶ。

（煩わづえな）

「禿こなら此方こつちだ、付いといで」

立ち上がり大部屋を横切って行く頃には、遊女達は無関心に朝餉の続きに勤しんで居た。

薄汚い台所では、禿衆がきゃいきゃいと黄色い声を上げ朝餉を平らげるのと同時に忙しなく口を動かして居た。

「末続すえつぐ」

「あれ、何だい姐さん」

振り向いた自らの禿を手招きし、少女をずいと前へ遣る。

「新入りだよ、面倒見てやんな」

そう言えば、可愛らしい笑みで末続が答えた。

「相解った。あんた、名は有るかい？」

小走りで駆けて来た末続が、少女の前で又笑う。

「あ、ま、松乃……」

「そっか。朝餉未だだろ？此方^{こっち}」

目を泳がせる松乃の手を引き、末続は禿衆の輪の中へと連れて行くのを白鷺は、只見詰めて居た。

（掃き溜めの鶴だねえ）

何時か身売る時が来る。

松乃のあどけない笑みも、何時か、此の世を嘲るものになり行く。其れは間違い無く、其れだけは確かに。

「世知辛いねえ」

煙管を吹かせば、ゆらゆら揺れて消え行く煙。

行く末を思わせて、白鷺は目を細めた。

鶴は鶴の儘では居られ無い。

皆、現うつろと欲に塗れ、白濁の中で生き抜く術を身に付けて行く。

「其れが現さね」

此処は遊廓。

其うして女が生きる処。

床無し奇譚 零

朱に暮れた空に、煙管から立ち上る薄煙が消えて行く。

ゆらゆら、ゆらゆら。

「姐さん、今日は……」

只々其れを視線で空へと追う白鷺に、末続すえつぐは、戸惑いいつも其う問うた。

（朱の空か）

消えたのか、溶けたのか。

煙は只朱に染まり、彼の男かを思わせた。

「今日は店終いだね」

「……相」

すらりと閉められた襖の音を背に、白鷺は只思ふ。

（床無しで買える仕合わせ何ぞ、矢っ張り此処には無からうよ）

ふう。

此処は遊廓。

夢現、在りもし無い束の間の仕合わせを求めて、男と女が交わる処。

薄煙は矢張り、朱の空へと染まって消えた。

床無し奇譚 壺

其の男は一風変わって為た。

背は高く顔は男前、長い黒髪を高く括り、無精髭が良く似合う。其して多くを語ら無い。

三日前から、白鷺の処に居続けて為る。

此処迄は、他の客と其う変わら無い。

只、居続けにも関わらず、床入りは一度も無く、何より生気と言う物がまるで感じられ無かった。

「あたしはそろそろ朝餉に行くよ。あんさん、どうするかい」

「俺はいら無い。行って来い」

「其うかい。じゃ、好きにしとくれ」

起き抜けで乱れた髪を軽く纏め、白鷺は部屋を出た。

大部屋では、其の男の話題で持ち切りだった。

なまじ見てくれが良いだけ在って、噂好きな遊女達は気に為るので或ろう。

「白鷺、或のお客と床入りしたかい」

「否、未だしてねえよ」

部屋に入るなり、興味津々な朱燕しゅえんに顔を覗き込まれる。

（どうだって良いじゃ無えか）

其れは言わずに朝餉に食らい付く。

お足さえ頂戴出来れば其れで構わ無い。

逐一詮索するのは好きでは無いし、面倒は御免で或った。
隣に座った朱燕は、未だ何か訊きたそうだ。

「あたしは何も知ら無えよ」

視線さえ遣らずに其れだけ告げて、残りをさっさと平らげた白鷺は、
早々に部屋へと戻った。

（関係無え事だろうに）

裾が床を擦る音が、微かに鼓膜を掠める。
此の音が嫌いだ。

媚びる事で生き抜く女の象徴の様で。

「仕方無えか」

其れしか生きる術を持た無いのだから。

或の男にも理由が在るのだろう。

其れをどうこう詮索する等、何故自分が此処に居るのかと同じ位に下ら無い。

（話すと言うなら……否）

男は話すだろうか。

何方どこだろうと構かまわ無いが。

何をするにもお足次第。

此処は遊廓。

朱塗り格子に囲まれた一つの奇譚の始まり始まり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3874p/>

遊廓異聞書

2010年12月14日01時35分発行